

[題名]

薬物治療がうまく進まない患者の“不安”に着目した薬局薬剤師の継続的アプローチ

[目的]

薬物治療がうまく進まない患者の多くは、治療に対する不安を複数抱えており、内容も絶えず変化する。それを医療者に自己表現出来ない患者は孤立する事もある。セルフケア行動の実行には「知識・技術・意欲」が重要であるが、薬局で対応していると、不安の多くは知識の問題や技術の不足が占めていると実感する。そこで、このような患者に対し、知識・技術の問題から来る不安に着目し、セルフケア行動を改善した事例を紹介する。

[症例]

症例 1) インスリン導入や服薬説明を長く拒否していた方。継続して担当することで複数の不安がある事が判明した。まず針を刺す事や一生継続する事への知識面での誤解があると判断し対応、1か月後導入に至る。しかし注射をしない日が続き、聴取すると低血糖や感染の不安、食事・睡眠時間が不規則な事での技術面での不満が分かり、SMBG 導入、服薬時点の再設定を提案し、徐々にアドヒアランス向上に繋がった。

症例 2) 55歳で1型糖尿病を発症し教育入院した女性独身患者。退院後に初来局。「言われた通りにできない」と泣き出した。具体的に尋ねると急な生活の変化や仕事で食事時間が不規則になる事に対応できない技術面の不安があった。宅配食の紹介や補食の指導を行うも、低血糖への不安が続く。次の来局時、食事時間確保や補食への理解を職場に求めるよう提案。徐々に周囲の理解を得て低血糖も減少。今では海外出張にも意欲を出している。

[結果・考察]

不安を多く抱える患者は、次第に治療への意欲まで低下する。今回、知識・技術面の不安を一つ一つ聞き出し、問題点の整理や解決方法の提案を行う事により、治療への意欲も向上させる事が出来た。薬局薬剤師が継続的に不安要素を聴きだす事は、セルフケア行動の実行度を上げるために有用な役割であり、今後もアプローチ方法を広く検討していきたい。